

半年ぶり 対面授業へ

静岡文化芸大 準備着々

浜松市中央区の静岡文化芸術大は、後学期が始まる十月一日から、約半年ぶりに対面授業を再開する。ほとんどの新生が大学に足を踏み入れたことがない状況が続いているが、新型コロナウイルス対策を着々と進め、八割超の授業を原則対面で実施する。職員は「普通に楽しめる学生生活を守りたい」と語る。(篠塚辰徳)

コロナ禍で同大は今春、卒業式と入学式を中止。九月までの前期の授業はオンラインに移行し、七月ごろから対面授業の再開に向け準備を進めてきた。



食堂のテーブルに設置された飛沫防止のついでに、いずれも浜松市中央区の静岡文化芸大で

食堂についたて／AIで発熱検査

対策では、食堂や学生の自由スペース、座席を減らすことが難しいパソコンを利用する部屋で、飛沫を防ぐために耐熱性に優れた透明なプレート（各テーブルに設置。地元の天竜材を使い、浜松市の補助金を活用したり、学内の工房で職員が空いた時間にプレートやアルミを加工し、ついたてを手作りしたりして経費を抑えた。

このほか、教室は着席可能な場所を定員の半分に設定。出入り口には人工知能（AI）を搭載したカメラで発熱をチェックする仕組みを導入した。学生には毎日の体温や健康状態を記録する用紙を配り、感染者が出た時の抑え込みに利用する。

十月からは学内でのイベントも実施し、クラブ活動なども段階的に再開する。同大地域連携室の宮野哲室長は「安心安全に配慮しながら、学生たちがこれまで通りの環境で勉学に励めるよう努力を重ねたい」と話した。



工房で、ついたての組み立てをする事務職員ら